江東区立深川第一中学校　　田口　夏葵

祖父が教えてくれた税金の大切さ

私の祖父は目が見えません。祖父が外出するときには白杖を使いタクシーに乗るときは福祉タクシー券を利用しています。私は、「これらの制度はどのようにして支えられているのだろう」と疑問に思い、調べることにしました。

調べてみると、白杖は身体障害者手帳を所持している人を対象とした補助制度があり、購入費の負担を軽減できることがわかりました。また、福祉タクシー券は市区町村などの自治体が住民から集めた税金を元とし実施している制度であることも知れました。つまり税金は、祖父が安心して外出し安全に生活することを支えているのです。

私が小さい頃祖父と祖母と共にタクシーに乗ったときにも福祉タクシー券を利用していましたが、その頃の私は「なんでお金ではなく、券で会計しているのだろう。」と税金によって支えられていることを考えたことがなかったけれど今回調べて多くの人が納めている税金のおかげで生活や移動できているのだとあらためて、実感することができました。

さらに税金が使われている場面は様々あることも分かりました。医療や介護、子育て支援など主に社会保障に使われています。私はそれまで税金は「納めるもの」というイメージしかありませんでしたが、実際には多くの人の生活を支える大切な役割を果たしていることを知ることができました。

もし税金がなくなると、祖父が受けている制度も受けられなくなる他に、公共サービスが消えてしまうことや救急車が有料化、ゴミ収集車が来ず街が汚れてしまうなど治安や安全が保てなくなるといった問題が起きてしまいます。そのため税金を払うのが苦痛、めんどうくさいなど思っていても私たちが生きていく上には税金は大事と思うことができました。

私は祖父のことをきっかけに税金について考えましたが、同じように支援を必要としている人は祖父だけではありません。税金は多くの人が安心して生活するために欠かせないものだと感じました。

今回、祖父の生活を支える制度について調べる中で、税金は医療や介護を支援するだけでなく、祖父のように支援を必要とする人が安心して暮らせる社会を支えていることを学びました。これから生きていく中でこの学びを忘れず、税金はただただ納めるだけでなく一人一人の生活を支える大切なものだということを意識していきたいです。これからも、祖父をはじめ、多くの人が安心して暮らせる社会が続いてほしいと願っています。

江東区立亀戸中学校　　中山　麻優

税金で紡ぐ命

私の祖母は令和八年熊本地震の被害に遭った。家の中は足の踏み場がないほど酷く散乱し、断水や停電になり、この激暑の中、エアコンもつかなくて非常に辛い思いをしたと話していた。さらに、地震で足の親指の腱が切れるなどの怪我をして、六十日間は必ず安静にしなければならないので仕事もできなくなってしまった。今すぐ助けに行きたいのに近くに住んでいるわけではないから何もすることができなく、悶々としていたとき、私の代わりに祖母を助けてくれたのは「税金」だった。

電気は地震発生した二日後に復旧し、無事にエアコンなどが使えるようになり、そのときの熊本の気温は約四十度ほどで熱中症の危険がある状態だったので対応が早くて、とても安堵したのを覚えている。また、祖母が特にありがたいと思ったことは「公的な炊き出し」だと言っていた。水が長い期間使えなくて自宅で調理できなくなり生活が困難になった時、公的な炊き出しで温かく栄養のある食事をとることができ、本当に安心したと話してくれた。

私は公的な炊き出しについてよく知らなかったから調べてみると公的な炊き出しは国民の皆さんが納めた税金でまかなわれていることを知った。また、祖母の怪我の治療やリハビリを支える医療制度、崩れた道路やインフラの復旧作業など、私が意識していない場所でも税金は人の助けになってくれていることが分かった。

そのとき、私は気がついた。以前の私は、税金とは「買い物をするたびにお金をとられる嫌なもの」だと思っていたが、自分じゃどうすることもできないときに助けてくれるのは誰かが必死に働いて納めた税金であり、税金は「生活を支え、命を紡いでくれるもの」なのではないかと。災害時、そして普段の生活でも私たち学生は大人が納めた税金にとても助けられている。そして今度は私が大人になったときに納めた税金は、きっと次の世代の助けになってくれるはず。

納税はただの義務ではなく、命を紡ぐバトンであると思う。だから私が社会の一員となったときは、ただ納税者になるのではなく、見知らぬ誰かの助けになれるような大人になって納税をしたい。誰かの納税が祖母を助けてくれたときみたいに。